

【資料紹介】小松市称名寺所蔵『烏兔記』（明和六年三月～五月十五日）

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻

小 西 洋 子

石川県金沢城調査研究所 所長

木 越 隆 三

人間社会研究域学校教育系 教授

黒 田 智

石川県立図書館 加能史料調査委員

室 山 孝

人間社会環境研究科 人文学専攻

渡 貫 多 聞

要旨

小松称名寺所蔵「烏兔記」は、小松勝光寺十一代住職周好による、明和六年（一七六九）一年分の日記である。特に「小松寺庵騒動」に関する史料として知られている。また、周好が日々伝え聞いた話が書き留められており、小松町周辺のみならず、大聖寺・越前の出来事など、その内容は多岐にわたる。

既存の翻刻は誤脱もあるため、改めて全文を翻刻し、紹介する。翻刻により、多くの研究者の利用に資したい。本稿は二回目である。

キーワード

「小松寺庵騒動」「郡中御影」 能美郡 近世浄土真宗

【翻刻】

三月朔日

一、御真影付御取持肝煎講中頼之義二付、達残候分二ヶ村へ今日罷越候処、吾人之肝煎者日蓮宗、吾人者高田派二而御座候、併一郡一統之義二候故、受者宜しく、講中も出来致、大悦致、帰寺致候、扱々宗旨^{（宗）}弥榮之端相与悦斗二御座候、

一、越中古国府勝興寺殿再度金城へ為御立替、御帰俗二付、西御門主^{（本願寺法如）}方被進候三幅対懸物図賛覚書、

富士之絵三幅対、円満院宮祐常御筆

右、勸修寺宮御賛^{（近世八景見世）}

あしからの山たちかくす霧のうちに

ひとりなる、富士のしら雪

中、近衛撰政^{（近世内書）}

言の葉もおよハぬ富士の高ねかな

みやこの人にか、かたらん

左、(兼上見志)
閑院宮

立のほる雲もおよハぬ富士のねに

煙をとめてかすむ春かな

此繪賛之覺書、笠屋弥右衛門所持二候間、借用致候、扱々珍敷物二而候、

二日

一、差而相替ル品者一向無之候、夜二入候而、唯雨風はけしく相成、東雲頃迄二晴申候方外、別義無之候、

三日

一、京都三条高橋新七、号子謙、(冷泉院之御門弟二成)、歌を詠納テ上申候、其歌に

散もうし 吹すはいかてかほるまし

心つくしの梅の下風

と申上候得者、被仰出候者、此歌者妙歌ニ而候、是以後者、歌詠候事可為禁制旨被仰出候与、埴田屋長兵衛咄ニ承申候、

四日

一、朝五半頃方余程風ニ而、七少シ前方少々雨降候得共、早速晴致候、晴候、此外差而相替義者無之候、

五日

一、串茶屋町芝居、明後日方顔見世致候由、(今江村)月咄承候、

六日

一、(紀州水戸)紀州殿御領地之内之浦方江唐船壹艘着致候、依之、右之舟者本唐之舟ニ候哉、通士も差而無詮、此船を先へ御送候ニ付、夥敷御物入故、御用金等之義も前々方者過分ニ被仰付候、仍先達而記置候三ツ井も右之御入用金ニ候旨、大聖持谷口清安咄ニ承申候、

七日

一、日之内快晴、夜も静ニ而御座候、差而相替義者無之候、

八日

一、高岡超願寺上京之由ニ而、門徒壹人召連參着致候、其夜承候得者、先月彼地之辺大風ニ而、井波瑞泉寺殿鐘樓吹返シ候旨咄致候、

一、昼夜共ニ相替義者、差而無之候、

九日

一、晴天ニ而者候得共、朝五半頃方余程風荒く、暮六半頃二者しつまり候、其外別条無御座候、

十日

一、超願寺昼八時出立、大聖持泊リニ參申候処、今江村八幡屋方迄拙・来生兩人見送、彼二候而壹獻進メ申候、

一、本吉等之辺、於浦方船方共ぬけ荷致候ニ付、加州郡奉行之内三人、能州郡奉行之内兩人、遠慮被仰付置、尚又船頭者御国法之通り可被仰付段、其間へ有之、風聞致候、扱く浦方之騒動氣之毒ニ存候由、

吉竹屋九兵衛咄ニ承申候、其荷物者米ニ而候由ニ御座候、首尾克納候様ニ与存事ニ御座候、

一、昼八時ニ長崎出火致、三軒焼失候よし、町者勿論、近在以之外騒布、風も少々有之候故案し申処、早速ニしめり、先々大悦致候、其砌超願寺見送ニ而、大領野を通り候処、長崎真入寺舎弟廉応ニ逢ひ、以之外急キ候様子ニ而、互ニ挨拶龜抹成事共ニて御座候、

一、夜五ツ半頃、自是東里八幡辺出火之由ニ而騒敷事ニ候、評判而已二候、

十一日

一、江沼郡宗門寺請之文言如左、

宗門寺請狀之事

加州江沼郡何村何右衛門誰

一、何宗 何那何村何兵衛何 誰

飛脚を以如斯二御座候、恐々謹言、

当役

勸掃寺 印

三月廿一日

助役

勝光寺 印

月番

御家老御衆中

右之通申遣、称名寺殿者御懸合二候者、歎キ之文体二而三ヶ所へ被遣、且又御肝煎講中方も集会所・御納戸両所へ書状遣申候、

一、町郡寺庵道場・御取持講中へ触出申候文言如左、
今般当郡へ格別御差向御使僧之義二付、京都方御紙面到来、致披見候処、御本山御繫用、御役僧中御手張、依之当郡へ御使僧御差下シ之日限いまた不申来候、仍而当廿五日御講相延シ候条、右申入度如斯二候、以上、

当役

勸掃寺 印

三月廿一日

助役

勝光寺 印

町郡寺庵・直參道場へ者如此、御取持講中江者、除助役廻口を加へ相触申候、此義二付本蓮寺殿一向二承知無之候故、当役・助役両印二而相触申候、此一截不思議ニおかしく存候故、為後代書記致置候、

二十二日

一、角院殿御仲間へ御示談も無之、御本山へ伏箱被遣候由、則朝五頃方村井屋喜兵衛參シ、七半頃二決談致書状相認、十五日出之、三度ニ渡シ、状賃五拾銅払候旨承申候、何事二候哉、御寺法之義者御仲間一統可及示談等、尚又御寺法者其年之当役方可致所不能、其義御本山へ一分二書状箱御登七候段、一向難心得候間、書記致置候、

二十三日

一、廿一日二京都へ又々登セ申候飛脚勘兵衛、宿々二御使僧京都方御下向有之候哉之趣相尋、段々罷登り候所、通り過シ今庄二而相尋候得者、昨日府中泊りニ、吉崎へ御差向之御使僧罷下り候旨承、引返シ追掛候所、水落二而出合、則御本山江小松方罷登り候飛脚之者二而候、小松へ之御使僧者、御下シ如何之義二候哉之相尋候所、いまた不承候、則小松へ之御状箱持參之旨ニ而、相渡シ申候、飛脚右之御状箱唯子坊より受取、今昼四過二下着致候、御状箱之上書者、本蓮寺殿・勝光寺殿与有之候故、角院殿へ隣院殿方及案内候得者、他行之由御答有之、依之拙方、京都方御状箱到来、定而御使僧之義存候得者、早ク披見致度候間、御破封御披見後、此僧へ御渡可被下候之趣、添状致シ、使僧知照を以、角院殿之行所へ可參由、申付遣候所、其節者在寺之旨ニ而、則破封披見写被返候、披見致候文言如左、

貴札致拜見候、先以御門跡様御機嫌克被為成御座候、然者御仲間為惣代、先達而称名寺方上京、委曲被相願候一件、御聞届之段、御門末一統難有御請申候旨、就夫今般御差向之御使僧発足日限等、一郡へ相触被申度段承之候、右一件先達て称名寺上京ニ而被相願候二付、先御聞置被成候間、何れ共追而御沙汰可被仰出段、同人江被仰渡候事二候、今般各方之御紙面二者、右之願筋御聞濟有之候様二相聞へ候、此義甚間違之事二候、差而御聞届与申訳二而者無之候間、此等之訳、称名寺方へ篤と御聞合可被有之候、且御使僧発足日限等之儀も、先達而一郡へ被相触度由、此儀とても右被仰渡相濟候迄者、是迄之すかたニ而、別ニ被相触候二者及申問敷候、且例年一通り之御使僧之義も、右願之一件、何れ共被仰渡候迄者、其御沙汰有之間敷候、右御報如是二候、恐々謹言、

若林藏人

三月十五日

直政 印

下間治部卿

頼静 印

加州小松

本蓮寺殿

勸婦寺殿

本光寺殿

本覺寺殿

勝光寺殿

右之通御仲間連名、称名寺殿者別ニ御書状箱書到来致候、状箱角院殿より被相返候節、遣候書状返書文言如左、

京都之紙面到来ニ付、為持被遣致披見候、先達而称名寺殿御下向之節被仰聞候与者、甚相違之趣ニ御座候、ケ様ニ不決定之事ニ御仲間連印之御請等相登候事共申者、御同例ニおゐて僉儀未熟之段、難得其意事ニ御座候、拙僧ニおゐて外聞ヲ失、迷惑いたし候、以上、
三月廿三日 本蓮寺

三月廿三日

勸婦寺様

勝光寺様

右之返書、又入用之事も可有之与存候故、留置候、

一、京都方格別御使僧之義、いまた御聞届与申義ニ而者無之段申来候得者、角院殿ニ者赤瀬屋次右衛門・村井屋雙子等打寄、甚歡喜被致候段承之候、以之外之不敬之至、言語道断之事ニ候、最初御仲間連判之振合与存外之事ニ共、奇怪ニ覚申候、

一、先達而称名寺殿格別御使僧願之義ニ付、上京被致候得者、何与相心得候哉、赤瀬屋次右衛門澗法庵方へ注進ニ參申候、扱々御正統信仰与申身分ニ者不似合事ニ候、一笑可致事、不過之覚候、

一、能美郡方格別之御使僧被願候段、承申候、若々御使僧格別ニ御差向有之候得者、能美一郡及大変候間、澗法庵善福寺殿へ咄申候所、善院殿被答候者、格別之御使僧申受候得者、御本山之御為メニ相成

申候事有之間敷義ニ而無之候得者、強而差留メ候事難心得与被申候得者、澗法庵再答ニ者、兼而熟談致置候与申候旨承候、誰与熟談致置候哉、未審被存候、

二十四日

一、淨誓寺門徒病死ニ付、口上書遣申候、文言之覚、

口上

拙僧且那埴田屋小兵衛妻、致病死候ニ付、及断候、御伴僧之内御參詣被仰付可被下候、尤葬式時割之義ハ、此者へ御尋、乍御苦勞御參詣可被下候、以上、
三月廿四日 淨誓寺 印

三月廿四日

勝光寺様

御台所

右之通申遣、印形間違有之候故、相返申候所、見合印鑑相出申候、則葬式者暮合ニ致へく旨申候間、參詣之義妙永寺へ申付候、
二十五日

二十五日

一、昨昼八半頃方雨降出、夜を通シ尔今晴不申、以之外之大雨ニ相成申、梅天氣色ノ様ニ見渡り申候、
二十六日

二十六日

一、雨者一昨日より降続、今昼九過方晴候而、八半頃者漸快天罷成申候、扱々夜前之風雨不思議ニ思ふ斗ニ候、

一、昨日昼八頃、角院殿出府様子、通り掛ニ西照寺方へ立寄、立花・砂ノ物等土足ニ而被見候由、慥ニ途中ニ而出合候者之咄ニ承候、供

ハ若党・林内兩人ニ而御座候、林内ニ相尋候所、出府様子申候、相尋申候者ハ大工之七郎兵衛与者ニ而御座候よし、隣院殿ニ而承申候、此等の義共難心得候故、留置申候、扱々今宵者静成事ニ而御座候、

候、

二十七日

一、角院殿出府之様子如前、一昨日則赤井殿下ノ江方少下毛之方ニ而

出合候処、相尋候得者、少遠方へ罷越与之事二而、何方与申事者不被申候、大体者出府之様子二相見へ申候与、則赤井殿御咄二承之申候、一、本折長四寺了忠者瘡二而、頭へも鼻も以之外見苦敷相成候故、先頃信証院様御忌之節も出仕者不致候由咄承候、

二十八日

一、隣院殿二罷在候小坊主者、当春越前米脇親殺之者之倅成由、則坊主二成度よし二而参居候、則隣院殿御咄二承之申候、

一、隣院殿門徒之内金沢方、澗法庵金沢発足者来朔日二日成様子、為相知申候、

二十九日

一、能美郡格別御使僧願之義二付、澗法庵金府評判以之外悪敷、彼是以余程不首尾之様子二相聞へ申候、就夫前二も記置候通り、能美郡格別二御使僧願上候事を以、御本山之御為二相成候哉、委曲御不為之事哉、不得知候二而差留候事、我情を働候趣、言語道断之坊主哉与而、善福寺殿以之外腹立被致候由、則善院殿へ出入之者西屋吉右衛門与申者咄申候、且又松任聖興寺殿二も澗法庵へ対シ被申候者、先年方能美郡之義者、格段之思召有之候故、御真影も被下置候、依之此度小松仲間中、格別二御使僧被相願候処を、其元被差留候事難其意得、且能美郡之義ハ、其元杯之一往之料簡二而者不行杯与与、及対命、澗法庵者言負、黙然与して居申候旨、尚又金沢二も、以後者御使僧二も彼澗法庵者受申間敷、以之外不評判二而、初与者天地雲泥之相違二罷成申由、埴田屋長兵衛金沢方罷帰り咄二承之申候、一笑々々、

四月朔日

一、隣院殿・予・安藤喜繁三人連レ二而、真向なる太郎丸へ行寄、夫より八幡宮之拜殿二而も一献致シ、乘興候故、直二芝居へ参し、不計慰致シ、夜八ツ頃二帰寺致候、

一、夜九前火事之様子二而、芝居小屋内外騒敷候故、芝居方出見受候

処、大杉谷之様子取沙汰致候、空以之外赤く相見申候、夫方帰ルさ二見候処、また薄赤く相見候、又者山火事之様子二も申候、いまた其実不相知レ不申候、

二日

一、昼夜共二相替義者、差而無御座候、唯雨はしめくと打降、左ながら梅天之内之様子二相見候、

三日

一、鶴飼妙院殿婚姻有之候二付、今朝知照を祝義二遣申候、いまた雨は昨日之儘二降候、

一、一昨夜火事者、九山成様子、又余程焼失致候旨承候与、安藤喜繁咄申候、

一、今浜光西寺殿方書面相届候処、其内二加北郡谷内村永楽寺之新発意と者、去去年已来出入御座候而、新発意方へ者、組合且那附居候得とも、甚悪布事御座候而、去年四月牢者致シ候、就夫組之内御門村光照寺与申者、当十五日公事場二而御詮義之筋有之、不埒成事共申候由二而、加北郡三組之寺庵へ御預り二相成、押水廿七ヶ寺へ右加番被申付、無理二御受申、無是非相動候よし申来候、扱々迷惑之事共二而候、

一、彼地以之外困窮故、近頃者盜賊徘徊影布事二而候旨、則彼方申来候、

一、福井殿先例有之二付浦廻被致、先々月廿八日二三国江被出候、然

所二前々者、揚屋之女郎・傾城之類老人も出シ不申候処二、此度者不苦趣二而、揚屋之格子杯をはつし、家内を寄麗二致シ、傾城之類を大体当分二配り合七、前之方二者禿杯、後二者傾城共居并罷在候而、殿拜ミ申由、且又先月四日・六日両日者広敷浜廻、是も同様二被申渡、傾国共色々之稽杯致シ罷在候旨、前代未聞之賑シサ二而候旨、吉竹屋九兵衛咄二承候、併越前者以之外困窮故、芝居杯者一向二無之候、

四日

一、於隣院殿ニ而承候得者、一昨日越中高岡何町ニ而候哉、出火致シ、家敷六百軒焼失致候由、蛭川や八右衛門咄申候、且又朔日之夜之火事者丸山ニ而、是者家敷貳拾五軒焼失致候与同人咄ニ承申候、一、先頃往還手取川水出留り候故、湊浦之渡シへ官方之柄封之者差掛り候処、似寄者与合点致候故歟、酒代をネタリ候而、渡守共者危キ命を免レ漸々ニ侘致シ、以之外騒敷事ニ共ニ而候旨、隣院殿御咄ニ承候、

五日

一、定日月並之講日ニ而候処、四前頃御書法談半ハ、以之外之大風ニ而、御堂とひら三尺二六七尺斗暫時吹まくり候、且大雨しきりニ候得共、八ツ半頃方者晴候而、静ニ相成申候、

六日

一、昼夜共ニ差而相替事者無之候、気色者大体ニ而御座候、

七日

一、今朝承候得者、於宮腰浦一昨日之大風ニ三人乗獵船四拾三艘吹落され候処、三艘者本吉浦へ吹寄、残り四拾艘者行衛無之候由、妙永寺咄申候、扱々哀成事ニ候、

八日

一、隣院殿方人を以来り候者、称名寺殿御出ニ付、及示談度与之事ニ候、相答候者、此頃少々痛処有之候故、難出旨申遣候、漸有テ使僧妙永寺を以御用之趣如何与相尋候処、非余義、少々御本山上納物も有之候間、次手ニ御使僧催促之書面相登セ度与之事ニ而候よし、即返答有之候、因ニ越前西光寺御入来之義御申越ニ而御座候、扱々今朝方之降雨鬱々としたる気色、尔今晴不申、以之外淋敷キ事共ニ而御座候、

一、高岡火事之様子、評判区々ニ而、未儘成様子相知不申候、此頃金府方罷帰り候者、一向ニ承不申由、能美屋又助咄申候、

一、今暮合、本覚寺殿庭成井戸へ、十一二斗成女子落入、され共蓋共ニ落候故、過子者無之候、其落候砌者階子等も持騒キ候故、火事やらん与人々以之外騒キ申候、

九日

一、先頃五日之大風雨之砌、小松材木細工町村井屋小兵衛藏之旁成水道方辰上り候由、中村屋五郎兵衛咄申候、扱々怪敷事ニ而候、

一、於隣院殿、初而越前西光寺殿ニ得貴意候、酒興相重り種々賦詩・発句シ、咄之次手ニ、如松江鱸と有之候、松之一字唐音ニ而読候事相尋候得者、是者先年公方之儒者林大学督之了簡を以、如此唐音ニ

読候、其謂レ者公方之御院号ニ松之字有之候故、諱而スント為読候由咄被申候、色々申候内、正説之様ニ相聞申候、
一、気色者昼夜共ニ、左而已宜からぬ気色ニ而候、

十日

一、七頃方隣院殿へ参シ、御本山上納銀・書面等相調候ニ付、称名寺殿も御入来ニ而御座候、

一、時次郎殿一代浄土真宗、并嫡子義同宗旨ニ可被為成旨、且当八月頃者小松へ時次郎殿御出、則寺庵之御宿ニ而も候哉之趣、風聞致候、御廻之事者当所ニも不限、三ヶ国一統ニ御巡廻之様子ニ取沙汰致候、且又嫡子浄土真宗之思召者、若々嫡男御出生ニ候ハ、古国府江可被進思召ニ而も候哉之趣共取沙汰、唯今勝興寺へ者、時次郎殿御配地之内千石、永代寺領ニ被為付置候等之趣共、赤井殿御咄ニ而御座候、

十一日

一、今日者以之外之快晴、来生寺申芝居を心懸ケ、今江へ迄九過頃方出懸承候処、金城主天徳院殿御法事、今明日御執行ニ付、芝居者兩日之間差止候旨ニ而、七過ニ今江方罷帰り申候、寺庵者いまた触者到来不致候、

一、先比調合丸シ置候金勝丸千あかり、都合五百四拾七程有之候内、

四拾式程は包ミ、葉箱へ入置候、残而五百五程者袋へ入、部屋之折釘ニ懸置候、

十二日

一、三ツ屋村宝海寺新發意、去秋寺社奉行所へ、新發意靈授宝海寺後住之義ニ付追訴致候故、度々於本蓮寺殿僉儀有之候御者、寺社奉行月番方書立を以及僉儀候、其書立兩通、則寺社月番永原求馬殿方差紙面、又者書立等二も、月番之印有之候、拙兩通之分見受申候、然所当春以来之義二候哉、又寺社所方書立与号シ、立紙二書記申宅通を扣置、右書立之趣者、先達而申入候其方宝海寺後住成之義ニ付、弥親宝海寺之相勤候不正義相伝へ間敷与之趣、宅紙を調可申与之趣、若く相調不申候ハ、直ニ公事場江可相渡与之事二候間、右之書付相調候得者可然、万一不調ニおゐてハ、右寺社所方之書立読聞セ、直公事場へ可相渡候間、左様ニ相心得不正義不相統趣、宅紙相調へ可然、其方慙ミ候故申入候与、本蓮寺殿被申聞候得共、一向ニ承知不致候、無本意其座者立退キぬる、然ニ先頃角院殿へ出入之六兵衛与者、隣院殿へ参咄候者、先頃寺社奉行所より、靈授御僉儀之趣御書立参候故、角院殿相読聞被成候処、寺社奉行月番之印無之候間、一向ニ靈授承知之様子無之候、奉行印無之事者殊重キ故、月番奉行之印無之候杯咄申候、就夫頃日角院殿寺社所方出府可有之与之書面参候得共、病氣御断、出府無之候風聞承候処、其無印之書立与云者、謀書之様子取沙汰致候、彼是考合候得者謀書之事実正二而、若々寺社所江靈授方手廻致し、依之出府之差紙面参候故、病氣断二而出府無之候哉、様子無心元存候、尚又此事実決二而於有之者、大騒動之事故、氣之毒成風聞存し、隣院殿御舍弟刑部卿殿御咄ニ承之、驚入申、御互二氣之毒之様子語合申候、

十三日

一、先達而書記致置候、於能州澗法庵法義混難被致候二付、其御も格別ニ御書・御使僧と奉願、御下知を蒙度与之義ニ、途中迄、珠洲郡

善慶寺羽喰那本念寺殿まで参候処、又追飛脚を以、先今度差留へき与之事二而、羽喰郡方婦寺致候様ニ承罷在候処、昨日承候得者、其義ニ付、鳳至郡方正願寺与申寺庵京都へ登申候様子、隣院殿御咄ニ而承之申候、何願之義二候哉、委曲者いまた相知レ不申候、扱々澗法庵与申者者、云ひろけ候事者存居候得共、所々之変口、差而治ル事と存居不申、氣之毒成人付二而御座候、此様子二而者、当所兩寺遠慮之取斗之事も無心元、必竟御本山之御難題ニ不成様ニ与存斗二而候、

十四日

一、於隣院殿花之会有之、六七瓶程も出来致、扱々面白キ事二而御座候、雨も強ク降候得共、見物も余程相見へ申候、
一、澗法庵今日今江村泊り二而候旨、謎ニ承申候、角院殿本吉へ宝物弘通ニ参被居候得共、夜前夜通シ候、婦寺被致候、実正成旨隣院殿御咄ニ承之申候、且金平屋清右衛門・筒金屋久兵衛・朝倉屋伝七杯、右之様子咄申候、尚又昨夕方今江村へ、本蓮寺殿方之飛脚急成様子二而、以之外走り参候者二、北野屋伊兵衛逢候様子咄申候、定而右之為知二而も候哉与被察候、御本山之御用人二も不似合、宿を差置不非宿二も在二被宿候事、大体ならぬ我儘二而候様ニ被考候、小松を差除、今江之泊り者臆病之様二も被存、兎角く難心得存斗二候、我儘ニ在寺ニ被宿候事者、何事歎仕組事之示談二而も被致候様子ニ相聞へ申候、定而能美那格別之御使僧願之義、邪魔可被入申、巧二而も候哉与被存候、一笑々々、
一、昼八頃四手駕籠二而、澗法庵打乗り寺町通り参候を、謎ニ見受申候旨、埴田屋長兵衛咄申候、扱々臆病之第一人也、

十五日

一、寺社奉行所方遠慮・閉門・流刑等之者、組支配之内二有之哉之趣御尋之触、四月之月附二而出候所、角院殿方之添紙面二者二月十五日与有之、筆頭本覚寺殿方隣院殿へ相廻り候処、拙御示談、就夫御

咄先ツ本覺寺殿へ触相返シ、一往可相尋哉否之義、及示談被成候故、可然御尤ニ存候与申候得者、則御使僧知雲へ御口上之趣者、寺社所之御触被遣、儘ニ受取致披見候処、寺社所之御触ニ者四月与是有、本蓮寺殿之添状ニ者二月十五日与有之候、月之間違甚之事ニ候故、如何之趣ニ候哉、寺社所之御触之義ニ候間、一往御尋申上候与之事、申被遣候得者、本覺寺殿方之返答ニ者、御尋御尤ニ候、角院殿へ相尋、自之御答可申上与之口上、暫ク相見合被成候処、則本覺寺殿方使僧參候、其口上之趣者、角院殿へ相尋候処、是者御尤委曲者執筆之不調法与申事ニ而、則前之二之字を書直シ、四之字ニ致候而相渡申候与、使僧申候ニ付、又々隣院殿被仰候者、然者執筆之不調法与申事添状ニ而も被致申候哉、又者角院殿へ御尋之上、貴院ニ御直シ候哉之事、又候御尋可被成哉之趣、御示談拙へ有之候ニ付、先々夫ニ而事相知レ候上者、強而御尋も、如何御座候哉与申候得者、先夫ニ而止候得共、明朝ニ灯明寺を御召被仰候而、可然与申候得者、尚夫ニ而止ミ申候、扱々鹿抹成御触之執筆、御用を淨フ御仲間を盲者ニ被致候為体、言語道断之事ニ而候、

十六日

一、早朝ニ超覺坊為御使僧本覺寺殿へ被遣、夜前御申残之御口上ニ而被遣候処、又々被仰候通り御尤成義ニ候、最初於爰元其所氣付ス印形致候得者、強而左様成事も難申候得共、弥執筆不調法成趣、儘ニ承届置候得者、先此度者此儘ニ而御廻シ被下与之趣、及返答候与而、則御使僧超覺坊直ニ拙方へ又々御示談ニ被遣候ニ付、御答申候者、然ル上ハ先此度者其直シ候儘ニ而御廻可然与申候得者、其分ニ相成申候哉、其後者御使も相見へ不申候、扱々角院殿之不調法、寺附院殿之残念、氣之毒成事共ニ而御座候、

一、一昨晚澗法庵今江村願勝寺ニ被泊候而、角院殿斥示談之趣者、残り御仲間頼而遠慮被仰付へく様ニ与之示談有之候与之様子、一決有之候与、隣院殿御舍弟刑部卿殿御咄ニ承之候、澗法庵与申坊主も行

先不知大たワケ、加党徒之とらくら者共、足かふらりしやらり成様ニ、身用心か第一之事ニ而御座候、打手大笑々々、

一、寺社奉行所方之御触如左、

一、閉門

一、逼塞蟄居之者

一、遠慮并自分ニ指扣罷在候者

一、流刑并在郷へ被遣置候者

一、追込置候者并乱心之者之外、一門江御預之者

一、陪臣ニ而も上江掛り候義ニ付、遠慮等申付置候者

右之通被仰付置候者、組支配之内有之候ハ、如何之子細ニ而、何年何月方如此与、其罪之様子委細ニ相調へ、当月廿九日迄之内、有無之儀紙面可被指出候、且又組等之内才許有之面々も被申渡、是又有無之儀、右日限ニ夫々紙面直ニ指出候様ニ被申聞、尤同役中可有伝達候事、

四月

別紙之趣可被得其意候、以上、

四月九日

前田駿河守(平信)

篠原弥助殿(保之)

別紙而通之趣被得其意、夫々可被申渡候、尤門前之輩江も不相洩様ニ是又被申渡、右有無之儀、当月廿五日迄ニ永原求馬宅江可被書出候、先々早速被相廻、落着方可被相返候、以上、

四月十四日

篠原弥助

小松

本蓮寺

別紙三通之趣被得其意、組合之寺庵等へも夫々可有伝達候、以上、

四月十五日

本蓮寺 印

但シ、此四之字者ニ之字之直シニ而御座候、此義ニ付先ニ書置候趣、

本覺寺

勤婦寺

本光寺

勝光寺

松岡寺

称仏寺

静照寺

願勝寺

追而有無之儀、当月廿日迄ニ可被書出候、尚落着可被相返候、以上、

右之御触、朝五半頃本光寺方到来、見刻本蓮寺へ相返シ申候、

一、於金沢彦三町貳番町菊池十兵衛宅喧嘩有之、相手者御小請ニ而、

菊池氏首尾能生書為遂候後、切腹仕損シ候由、埴田屋長兵衛咄申候、且茶屋九兵衛先頃觀音之御能之節、出府致婦宅

〔欠損〕

〔相尋候得者、則本龍寺申候者、別而相替ル事

も無之、覺書ニ致シ、一遠慮能美郡小松何町何寺与肩ニ何年何月何

日ニ本山方被仰付置候与書、奥ニ者右之外拙僧組合門前之輩迄遠

慮・閉門等無之候与御書候而、可然候与申候ニ付、又申入候者御

触ニ遠慮・閉門等者、何ニよつて何年何月方被申付置候哉、罪之様

子委細ニ書出へき与之趣有之候間、何ニよつて与申事も書出不申候

而者難成存候、且拙僧共者淨誓寺遠慮之御も、寺社へ御請差上置候

間、罪之様子も書記可致候与申候得者、其義者重而御尋有之候節之

事、先此度者右通り之御答迄ニ而可然与申問候ニ付、難心得候故、

又押返、金沢等之様子被問候哉与申入候得者、相答候者、則金府御

坊・瑞泉寺殿杯之趣、如斯与相答候迄ニ而、慥成義も無之候故、隣

院殿へも右之様子相咄申候得者、一笑之後、一向ニ本龍寺之申分不

吞込之様子ニ相問へ申候間、又是方尋ニ可遣与之事ニ而、則超覺坊

參シ帰候処、相替ル義一向ニ無之候故、又一笑之後、申究候趣者、

組合方閉門・遠慮・蟄塞等、門前之者迄も有無之義、組頭迄取納、

角院殿へハ組頭一判ニ而相濟シ候而も、可然と隣院殿御申ニ付、其

通りニ相決シ、則案文共調、夫々江遣申候、先淨誓寺へ遣申候案文

如左、

今般從公儀御触御尋之趣、奉得其意候、拙僧義、何年何月何日本山

方書立を以、遠慮被仰渡罷在候、拙僧外門前之輩遠慮・閉門等無之

候、仍而御断申上候、以上、

能美郡小松八日市町

〔欠損〕

〔門・遠慮等無御座候、御尋

〕上候、以上、

年号月日

本蓮寺

上来書置候通ニ調へ遣可申旨申合究候、右御尋御触之取計、右之通

ニ而可然被存候、

一、毎年宗門帳調指出可申文書如左、

能美郡小松何町何寺

一、去年宗門御改以後、召置候家来男女共ニ言人も無御座候、

一、能美郡小松何町何寺

一、文言右同断

能美郡小松勤婦寺家来

一、淨土真宗

何郡何寺且那下人
去年九月方召置候

下男名

一、宗名

下女名

右拙僧并組合之寺庵門前之輩、明和四年宗門相改帳面指上申候以

後、召置候家来并借家人等宗門相改、人々寺証文指上、父夫同宗同

寺之妻子除之、帳面記上之申候、比外自宅・借家ニ入置候懸人・屋

守等之者無御座候、勿論宗門御改洩申者抱置不申候、以上、

能美郡小松東町

明和五年四月

勸婦寺

本蓮寺

右者隣院殿方恩借致シ写置候者也、只今遠慮之寺庵方寺請狀取申案文之通り如左相調へ、本蓮寺殿へ指出可申候、

拙僧組合之内、能美郡小松八日市町勝円寺、去年宗門御改以後召置候家来、男女老人も無御座候趣、相断申候二付、如斯二候、以上、

年号月日

勸婦寺

本蓮寺

右も隣院殿方恩借致写置申候、此寺通者別二致シ、惣帳面之外二指出可申候旨、則隣院殿御咄二而候、其通可然相心得取計可申候、且召置候男女家来、其時有無可相考候、

一、夜八ツ頃方以之外之風雨、音しけく候得共、明方二晴申候、

十九日

一、気色者大概、昼夜共二差而替義者無之候、且御堂やら以之外中ノ間天井張申二付、大工善太郎今朝迄二組物等之図引仕廻、今日より又木引、向ひノ九右衛門参り木引致申候、中老間百六拾目作料渡シ二致候、大工者一昨日方入申候、

二十日

一、能州妙厳寺殿婚礼有之候二付、知照遣申候処、今七過婦寺致候、澗法庵為御本山御使僧巡廻之様子、咄承咄之申候、妙院殿へ澗法庵止宿之一宿前ニも候哉、鵜飼不正義七八人者共方澗法庵へ取組、口称ニ奉頼事を悪敷申成シ、則其時之賄路金子式両遣申候処、受納致候事、余人不相知故、妙厳寺殿止宿之節、出迎ひ之僧俗影布事共ニ而候処、善知識之御使僧ニ而候得者、兼而申合候法義之正不如何与左右旁を張罷在候処、不正義之者共方書付指出申候、其文言如左、

口上

一、今般上様為御用、当郡御巡廻被為遊候由二付、幸之儀与奉存、同

行中申合、上様為御冥加金貳百疋・鳥目五百銅指上申候、於御用先々者御難題ニ奉存候得共、御持参被為成上納奉頼上候、

一、乍恐御窺申上候、当流御安心之趣、此辺御僧方江相尋御聴聞仕候所、如来之御誓ハ口称之本願なれば、諸之雜行・雜修・自力の心を捨て、我身は悪き徒者と思ひて、御影前へ向ひ言葉を并へ、私今度の一大事の後生御助候得と一声申上ルを、他力之信心と被教候二付、其通ニ奉頼候得とも、又疑おこり候を如何可仕与相尋候得者、疑起り候ハ、又頼直セと被教候故、前々のことく幾度もく御影前二出奉頼候得とも、埒明不申、其上板名御聖教御言葉の端を御聴聞仕候得者、何とやら御僧方の勸方相違の様ニ奉存、明暮歎居申候処、明和式年酉三月、幸上様為御用御代僧様其トキハ御巡廻被為成候二付、私共口上書を以御聴聞奉頼候得者、則私共被召出、御聴聞被仰候者、全御影前江出、口上ニ而申上ル事ニ而者無之趣等、正意之御勸化細ニ御聴聞仕疑晴、難有仕合ニ奉存候、然所御門徒中方御使僧様江出候儀を曲事と申立、両度の御講会合ニもはふき被申、其上私共を被難候者、其方共者口称を嫌ひ頼ぬ法義なり、又者自然法なりと被申候而、猶更口上頼を本と被勸候故、私共家内妻子親類等心惑ひ、いつれを御正意共難弁、歎暮居申候間、乍恐御聴聞被仰聞被為下候ハ、難有忝奉存候、為其雜言の一紙上之申候、御高覽奉頼上候、以上、

珠州郡鵜飼妙厳寺門徒

重兵衛

明和六年二月廿七日

松田玄祝

八郎右衛門

吉右衛門

彦左衛門

作左衛門

市藏

善知識様之

御代僧様

右之口上、澗法庵へ指出候得者、一覽致候故隙取、二月廿七日忌之御通夜も以之外遅ク相成、暮合ニ相成通夜初り、澗法庵之法談何れも念称之実不、今哉与耳を傾ケ聴聞致候所、怪敷も申出タリ、此辺ノ僧中法談勸化之砌者、勸者仏前ニ奉向、頼むを以宗之本意と勸メ、三業一致を以、他力之信心決定の相と勸事難其意得、三業一致を他力之信心決定之相と申事、当流之御勸化ニ其証文なし、且又如来之本願者口称を以其体とするとあれハとて、口上を以頼まね者ならぬと云者、不仏法之邪道と云者也坏と申、且又百年斗以前輪嶋之信教院と申者、如来を奉頼を以、宗之本意与被勸候、其頃於越後新潟不退院円箴与申悪僧、其意專一ニして此辺を徘徊シ、当流之御本意ニも不有事を申談シ、聞ク人を迷惑とするを不知、加党徒之致候事、不仏法之大道也、今以其旧執難捨、かかる不正義を勸申事言語道断之至坏法談々致候処、不正者喜ひ、正者悲り、翌日廿八日之晨朝ニ者参詣杯も少々ならて者無之、勿論翌日出立之節も、僧俗之見送一人も無之、漸不正義之者其之内方、一兩人出候方外者無之候、加様成偏屈申候故、御台所御難洪之義ニ付、懇志可励之御用趣与申候得共、一向ニ僧俗共ニ承知不致、彼澗法庵之馬鹿坊主、金沢ニ而遊女狂ひの積り候故、借金之重り故ニ虚言を構へ、自身之受納ニ可致ため坏とて、一向ニ承引致不申候旨、知照咄ニ承候、扱々此辺へ去々々巡廻之砌、法義売て口をこすり、度世活命之為とて、任誓法義禁ノ候事も、皆虚と成り、我身捨、度世活命之為ニ、国を替へ境を越て、仏法を売り、賄賂を取、善知識の教へを我意に任せ、御本山を軽しめ候、冥罰現ニ白状之為ニ体、歎も愚力他宗へ之面目、一宗ノ恥辱言語ニ難述、破家坊主難筆紙尽、記之も恥敷口惜斗ニ筆ヲ止申候、

二十一日

一、越中魚津照善寺舎弟少将、学解心得違ひ之義ニ付、御本山江被召御僉議決定シ、左右方対命殊終り、弥少将称名願体与申教候事、誤ニ決シ候節、如何可申付与家老中右御窺申上候処、被仰出候者、惑要文、学解之誤なれハ、我老人者無是非も、他之人を教へ候者誤なれ共、脱衣シ追放致候事をも不便与被思召、入置候処を寺内ニ可致旨被仰出候故、太鼓之番屋之下ニ揚屋之様成処をしつらひ、入置候処、其後樂邦院様方御家司中何時成共相揃可罷出旨被仰出候ニ付、或時打揃六人共ニ東殿へ上り候処、被仰出者承候得者、魚津少将義此度誤リニ決候故、獄屋へ被入置候旨承候、築地之旁ニ獄屋を作候事如何相心得候而、獄屋ヲ為作候、本願寺之老分なら者其心得も可有答ニ候を、如何相心得候而、獄屋を為作候、返答承度与被仰候処、家司中是非之不及返答ニも、唯御門主方被仰出候故、御意もたしかたく候故、獄屋と申義ニ而も無之、唯揚屋ケ間敷事を取置シ、入置候与家司中被申上候処、又樂邦院様方被仰候者、元来本願寺之可為家司者者、其心得も可有答也、忝も当家之御影堂は宣如上人御再建之砌、今帝之紫宸殿之円を頂戴被成、其通りニ草創被成、殊ニ築地等も禁裏之通ニ構へ、且北之隅ニ忌門を切候事、当流ニ者雜修与嫌可申を禁裏の写故忌門ヲ切り、且又伏見・龜山両帝之勸願所として、則方八丁を伏見院殿方敷地与定メ寄附有之候、築地之旁ニ獄屋を作り、身ニ誤り有之候者を入置候事、内裏今帝へ之憚有、家之家司たる者其心得なき事、不屈之至与、大キニ御呵りを蒙り、自夫獄屋をこほち、少将を御寺内町家預ケニ被仰出候事、是等絶言語候御取計ニ而候旨、其砌

〔築地北之隅之〕

〔評判有之候〕

(欠損)

(二十三日カ)

〔且隣院殿七頃〕

〔暮六頃方俄ニ思立、申へ芝居ニ参申候、

二十四日

一、日之内、差而く相替り申義者、一向二無之候、

二十五日

一、先日於小松鷹匠町七二成候男子、狐狸天狗之仕業二候哉、夜二入候迄相見へ不申候故、其名を呼尋候処、夜四頃城中御花島方出候よし、(南村先生) 蘭原左京咄申候、怪布事二而候、

一、当所八日市町久津屋次郎三郎類家、松任方勝手女中為馳走、今江柳屋二而遊興有之、久津屋次太夫杯も参合候二、夜二入女中者串ノ芝居へ参候ハんと、皆船二乗り出候処、其船頭子共はつれへ棹させ参候処二、常二狐船も参候はん濁之主居申候与申方へ参候哉、船二棹さし行掛り候処、前後左右へ一向二船動す、兎角致候得共、詮なく船頭者勿論、船中之女中殊之外之迷惑、彼是貪着致候得共、次太夫者酒酔前後茫隔、兎角之計ひも居申候内、真向方壹艘之遊山船方呼掛、何と其船者狐船二而候哉と声を掛候処、是幸と我等を助よと又声掛候処二、左右漕寄、誰二而哉相尋候得者、我等者久津屋次郎三郎類家之女中、松任方来り候者与相答申候、貴船者誰人そ与又尋候得者、我等者諏訪之神主遊山セリ与相答へ候程二、夫方彼是其様子を語り候を、夫者と驚キ、兎角計申内、久津屋次太夫妻船底を見候得者、火珠式ツ有之、ふと見候得共、申出も不致、暫時之内水底方右之火珠式なから飛出、行衛も不知、失意致候、夫方船動候故、芝居へ者参申候、是実二今江濁之主二而候哉、奇怪之事二而候旨、承之申候、是者廿一日之晩之事二而候、

一、廿三日之晩、隣院殿奥方拙方へ遊びニ御出、帰リ之節、知照御見送り申さんと門口へ出候処、東之方西之方を指て火珠壹飛行候を、謎二見候旨茂承候得共、是等者只今頃気色之替り、早降之模様二依テ飛行之事者、度々弊も見届申候、左而已替りたる事二而者無之候、唯前段之一品怪敷被存候、可相考候、

二十六日

一、今四頃於下里長野田村、安兵衛与やら申者老軒焼失致、則火事吊仁助遣申候、

二十七日

一、先頃金沢紙屋宗意上京二付、当所京町万屋八兵衛方二泊り申候、其伴ひ申候者二対刀之者壹人有之候、八兵衛其宗意へ挨拶二出相尋候者、何故之上京二而候哉之趣申候処、宗意相答候者、何与申候而一方へ寄たる事二而も無之、色々御坊之御用二付、此度上京致候よし相答、又八兵衛江宗意方相尋候者、当郡二者此春方任誓御講相初り繁昌之様子有之候与承候、様子者如何与相尋候処、八兵衛相答候者、一向左様之義承不申、去暮方御真影御肝煎講中も、先年方者むゑ、近年中絶之処、再ヒ御繁栄二被為有候故、御本山上納も度々之事与申候得者、宗意又申候者、其上納者何程宛上納致候哉与相尋候処、八兵衛申候者、何程二而候哉、下拙方度々京三度二渡候得共、金子故高相知し不申候与相答申候、然所傍之対刀之人申候者、其御真影与者何事ソ与相尋候処、八兵衛相答候者、是者祖師之御真影二而、先年時之御上人思召を以、当郡へ被下置候故、古来方是迄其御真影を御坊同事二相心得、尊敬仕来候与相答候処、其傍之人初而聞候様子二而、唯是はくと申候斗二而、八兵衛も勝手へ入り、跡者其儘二止ミ申由、京町伊勢屋弥兵衛方御聞之様子二而、赤井殿御咄二而承之申候、則同席二而隣院殿も御聞被成候、

一、角院殿是迄者公辺之取次役二而候を、此度澗法庵与取組、寺国法之触頭二成度旨二而、澗法庵被頼候処、此坊謎二其事を受合、夫方金沢御坊之御肝煎講中式拾人衆申有、此方へ澗法庵より取持之義被頼、尚又角院殿を寺国法之触頭二致シ、能美郡を御坊付キニ致度候間、各々も右之一件可被取持旨被致示談候処、欲二耽りシ宗意ことき之族者実とも受合候哉、多分者受合不申候、其内ニも分別候者有テ申候者、元来小松者微妙院様式拾年之御在所なれハ、御坊へ取

附候ハんと計、此取持候共、残り五ヶ寺之内ニ何成寺跡何成御墨付
二而も有之候而、思様にも成不申時者、還而御坊之恥辱与相成可申
候間、我等其義ニ付御取持之義難成与申候者者、多分ニ御座候、然
所を澗法庵申候者、然者除角院殿外五ヶ寺之仕損を見出シ、式三年
之内ニ遠慮為致、於其内ニ寺跡書物等をさかし致シ、三日成共、遠
慮之間ニ取計可申旨、又々及示談候様子者、角院殿を慥ニ触頭ニ可
致与澗法庵受合候様子ニ相聞へ候旨、則式拾人衆之内方御聞被成候
旨、赤井殿御咄ニ而承申候、此砌も則隣院殿御同席ニ而御座候、然
者先達而思召を以功德聚院様被仰出候御書立を、本覚寺殿方角院殿
へ渡間布と被申候事尤ニ被存候、人者面ニも不似合もの、心底者難
知、毒蛇悪龍之御教誡、非虚説、可愧可畏者唯此一なり、能々思量
をめぐらすへし、

一、金城主來月二日御帰城之様子、慥成事ニ而候よし、赤井殿御咄ニ
而承之申候、

二十八日

一、越中超願寺願事、首尾克蒙御許与、今七過拙庵迄罷帰申候、且其
少シ前方、能州妙巖寺殿方多賀丸出生并婚礼音物相兼、為祝義弥八
被遣、同時着致候、

一、澗法庵当十九日京着致候由、超願寺咄申候、且澗法庵着即刻下役
人へ相廻り申候、承候処、役人之分者不殘手廻シ致置候よし、承之
申候、

一、三ツ屋宝海寺新發意靈授義、弥明日公事場へ渡り可申由、妙永
寺・知照兩人方申聞七候、扱々角院殿如何与被案候、

一、上田織部義者、楠正重之け図ニ而候処、下間之連位房之け図ニ書
替へ、兼而御門主へ入御内覽候故、御家老ニ被仰付候後、桔梗之紋
拝領致候、桔梗之紋者蓮位之定紋ニ而候、上田氏之其意趣を採尋ニ
下間之家相統致、坊官望之様子ニ相聞申候、且又長浜横超院殿之御
新發意を費申候由、彼是望之様子相聞申候、且又横超院殿之御所存

如何思召候哉難心得候、相承ハ御家來、此方ハ御身柄、様子唯々不
審ニ被存候、

二十九日

(欠損)

〔七日談シ候〕

〔曹洞五大寺之和尚達〕

口を閉、微胸堪肝、何れも黙然与して居たりけるニ觀候、現ニ得勝
利、石州之和尚法印者脱衣之追放、或者後口手ニ掛繩引候事同前之
為体、不便成事共也、觀候者、東御門主方慈悲を以帰国致候者、挟
恚恨へきを尊察し給ひ、一生御養御扶持を頂戴シ、天晴之手柄、前
代未聞之事承之候、

一、三ツ屋宝海寺新發意靈授、公事場へ弥渡り候ニ付、角院殿并役僧
兩人出府致被居候処、何歟口問共有之候処、兎や角ととまつる体、
返答も前後致候様子ニ而御さ候事、知照承之咄申候、扱々氣之毒
千万、若々先達而之靈授へ申渡シ候書立者、寺社所之謀書ニ而者無
之候哉、様子無心元評判聞悪敷候、

五月朔日

一、宝海寺靈授義、公事場へ渡り候事、いまた実不難決候、其故者靈
授ハ寺社所ニおゐて御吟味有之、弥不正義受統間布之趣口上書致候
得者、親智淨へ対シ不孝ニ相成候故難成条、不相違哉之趣、一往御
尋有之、左様之通り前々方申上候通相違無之趣、慥ニ相答候得者、
其儘ニ相返シ、又々角院殿へ御預ケニ相成居申候由、安藤喜繁咄承
之申候、

一、於小松名有ル若者共、五人船ニ取乗候而、安藤喜繁・上官寺之菟
成筭を盗ミ、又角院殿之菟成筭をも悉ク日昼ニ賊候故、角院殿方承
來、追掛僉儀を致、其上町奉行江相断候哉、以之外重ク相成可申与
取沙汰致申候、盜候者先月廿八日之事ニ而候、筭之數者百六拾本ニ
而候様子、若々重ク取計之事ニ候得者、扱々不似合取計共ニ而御座
候、且角院殿も此頃者寺井村ニ而靈宝弘通有之、昨日帰寺之様子、

且歸寺後僉儀可有之管風聞承申候、如何相成候哉、取計之様子共無心元候、

二日

一、角院殿出府致シ居られ候様子、弥八慥二見受申候、先達而記置候様子之一巻も、則宿ニ評判有之候旨、弥八咄申候よし、知照咄ニ承候、

一、笋盜之者共侘致シ、今日相濟申候様子、承申候、

三日

一、舍弟他寺江遣シ入院之砌、組合へ遣可申送状之文言如左、

拙僧舍弟何、今年何十何歳ニ罷成申候処、何国何処何寺所縁も御座候ニ付、後住ニ仕度旨、則何寺一門中并惣且那中納得之上を以申越候ニ付、指遣申度御座候、尤誰其地へ罷越候而も、出入等仕候ハ、組合中へ掛御苦勞不申、拙僧罷出埒明可申候、依之誰判形相添へ奉願候、以上、

何国何郡何宗

明和六年何月何日

何寺判印
誰印

何寺

御組合中

右者、舍弟大式高岡超願寺江妙院殿方被遣候ニ付送状、金沢御坊宗敬寺方草案出候を見候故、写置申候、

一、此頃角院殿へ越前^(マ)テンレイ參候而、勸化致罷在候故、則来生寺へも右之様子頼ニ參候由、来生寺直ニ咄承之申候、一笑々々、

四日

一、妙院殿家来弥八、爰元二日ニ出立致シ、金沢泊リニ參候処、超願寺家来金沢之宿中屋豊右衛門方ニ而相尋候処、いまた參不申由、相答候与咄申候ニ付、様子無心元候故、今日湊・水嶋迄知照を遣為相尋候、

一、此間三ツ屋村宝海寺新發意靈授公事場へ渡り候ニ付、寺社所方角院殿被召候得とも、在遠方寺役故、いまた歸寺無之候与而、相返候由承之申候、

一、角院殿笋盜候ニ付、則門徒赤瀬屋

(欠損)

□□故今日出立、快晴珍重之事ニ候、道中も無恙歸寺

あれかし候存候、

五日

一、三王・諏訪之兩人氏子、御輿并神輿昇之者共ねり子之裝束等ニ至迄新出来ニ致シ、祭りを仕置申候、先達而御旅之節者、気色不快候得とも、今日者快晴、今日之祭者は迄者無之候得共、先年者有之、中絶之処唯今取立申由承候、

一、前田式部^(前田)舍弟前田兵部^(米)、米ぬけ荷騒動之義ニ付、賄賂取候様子相知候砌御答候哉、内遠慮致被居候由承之申候、

六日

一、於角院殿、越前テンレイ勸化并太子伝弘通有之候様子、妙永寺咄承之申候、

一、越中高岡仁兵衛与申者、越前福井殿之供を致シ、江府へ參シ、帰二京・大坂へも參候、帰ルさ今朝五半頃立寄申、高岡色々言伝共致シ遣申候、

一、夜前九半頃、矢崎村ニ而火事有之候得共、火者洩不申、壹軒焼失致候様子、能美屋弥右衛門咄申候、

七日

一、明六頃方雨降出シ申候而、尔今止ミ不申候、併ながら当月四日方入梅ニ而候間、雨降可申答ニ候、

一、澗法庵方能美郡へ之御使僧を差留候様ニ申候者、金沢御坊之後堂ニ而之事ニ候、而モ夫を聞候仲間中之内方直ニ御聞之様子、則隣院殿御咄ニ而承之候、是者先頃金沢御門徒之中ニ死去有之候而、淨誓

寺二一宿被成候砌之事二候、

八日

一、江州八幡之者共、毎年松前へ売物仕込二下り候二付、越前吉崎・加賀本吉辺之宣布船持を頼ミ、船を借り、松前へ下り申候、就夫先月五日前二右之者共拾三人乗、八百石積二一艘塩を積、吉崎を出船致申候処、先月五日之大風ニ於松前沖破損致候、尤仕込二下り候者に候得者、金子者式千両所持致居申候、然二屋内船隻艘漸々二助り候故、其船方右破損船之様子見分ニ参候処、一向二死骸・船板等打上申体見へ不申、且彼は相考候得者、金子所持致居候故、定而打殺シ埋置候哉与被存候、依之右之様子吉崎へ及案内候哉、昨日者於吉崎一時二葬式拾三有之候由、能美屋又助咄二承之申候、兎角く金か敵之世界ニ而御座候、

一、矢崎村焼失之翌晩、越前ニ而候哉、南之方高山越二火事、夥布様子相見申候由、若杉屋半兵衛咄申承之候、

九日

一、昨日者気色も快晴、夜も宣布相見候処、今朝夜明方方俄雨降出申候、併五半頃ニ者晴申候、扱々降候音瀟々々相聞候、
一、今日者三百五拾石当所町家へ出候由ニ而、軽キ者共手々ニ袋俵を携へ、御貸米配分ニ参候様子ニ而、賑布相見申候、
一、郡中御講志銀、御本山上納仕候二付、御印御差下シ、家司中添状文言如左、
貴札致拜見候、先以御門跡様御機嫌克被為成御座候、然者其郡御講志銀、別紙帳面之通指上候二付、為御差登候て落手候、則右之御印指下シ候間、可被相達候、恐々謹言、

上田織部

四月廿七日

正久 印

石井隼人

政忠 印

加州

小松

勝光寺殿

勸熯寺殿

右之添状、今四過隣院殿方為御見被下写置候、且上包之寺号列右之通、箱之上書者勸熯与有之候、内外不合如何、可為鹿抹条顯然二候、

十日

一、淨誓寺旦那鍋屋亦右衛門病死致シ候二付及案内、葬式者暮合、則当番へ妙永寺知照江申付候、

一、赤瀬屋重兵衛死去二付、諷經遣候砌、靈授一件同苗次右衛門ニ相尋候処、申候者、いまた靈授義者公事場江ハ渡り不申、先頃靈授寺社所江被召、先達而再三、親知浄不正義相勸候を受統間布趣、口上書致候様ニ申遣候処、何分ニも難成趣及断候、弥左様成心底ニ落着候事二候哉、今一往思案も可有旨、与力共方申入候処、何分不正義受統間布与之口上書者難成与申候故、又重而親知浄并靈授被召、右之一件被相尋候処、親子共二一向不正義坏与申候事者身ニ不覺事二候与相答候故、其通り口上書を寺社所江取置候迄ニ而、いまた公事場へ者渡り不申候与、次右衛門咄申候由、知照承之、又々咄承之候、

一、能州妙院殿家来爰元出立之日者、宮長聞成寺方二一宿致シ、翌三日四頃中屋豊右衛門方江参候由、則四日出之書状ニ超願寺申越候、

十一日

一、於安宅、金沢五夕・井蛙、越前丸岡之梨一抔打集り、千句興行有之候由、安藤喜樂咄ニ承之申候、其外相替義者無之、唯々雨者晴間もなく折々降敷、実も入梅之様ニ相見申候、

十二日

一、昼夜共ニ差而相替義者、一向無之候、

十三日

一、晝夜共二別条無之候、晝之内ハ雨者降不申、曇り気色ニ而ハ有之候得共、入梅之内ニ者先宣布気色ニ而御座候、

十四日

一、晝之内者雨はらくと少々宛、時々希ニ降候得共、続たる事ニテハ無之候、七過ニ少々雷式三度相聞申候、併其時者雨一滴も降不申候、

一、於金沢芝居弥願事被仰付候由、承之申候、初り候ハ、賑賑敷可有之与遠察致候、

一、手前御堂於北側切戸有之候、其旁ニ年来五拾歳斗と相見し男傭人并拾式三歳斗と相見し子傭人忍ひ居候処、誰哉与相答候処、答候様ハ、初夜有之候様ニ与存候杯申候、初夜者無之候程ニ早々帰候様与申候得ハ、出所を忘レ候体ニ而、釣鐘堂之方ニ行、後居申候様子ニ相見、以之外うろたへ候体ニ相見申候、何謂レニ而候哉、難心得者ニ而御座候、乞食之様子ニも不相見、何事ニ參候哉、所存不審ニ存候由、知照咄申候間、自夫挑灯をたて御堂へ廻候、

十五日

一、今日者以之外之快晴、但シ七過頃方隣院殿へ參候処、教恩寺了明も同席ニ罷在候、於金沢芝居弥願之通リ被仰付候由、風聞承候与申候得者、芝居ニ而者無之、角力ニ而候由、則今日五人下り候旨、知雲咄申候、隣院殿并了明も其通リ与申候、

一、於一針村当寺旦那宇兵衛後家、先妻之嫡男傭人有之、且其後家之子男式人有之候処、其後家村役人へ願申候者、先妻之子を仕出シ、御高并家財等当分ニ致異度由、願候処聞届、則先妻之子を仕出シ、則其子も納得ニ而申候処、いまた家財等も分不申候ニ付、子之方役人へ届候故、後家を呼寄糺明致候処、荒涼成事共申候故、不得止事、其村之手先若杉村兵助へ断申候処、早速ニ其後家ニ手錠を指、帰シ申候、且又役人共も惣領を仕出申候事を納得致候事、難心得候

与大キニ被呵候旨、則今日之事ニ而候よし、妙永寺咄ニ承之申候、
一、九頃於東町之上、馬氣を違ひ、馬子を追懸ケ、既咄付んとし候故、以之外騒敷事ニ候、

一、当城主当月十九日儘ニ御着城之様子ニ而御座候旨、金沢能瀬屋平兵衛咄承候、且於金沢角力追付有之候旨取沙汰致シ、且又昨日相撲取五人罷下り候間、何時方初り候哉与相尋候得ハ、一向ニ承不申、其角力取者富山へ行候哉、越中富山ニおゐて、追付角力有之候旨、風聞致候与咄承之申候、金沢ニ而者無之候、

一、越中富山松平出雲守殿、国主並ニ被仰渡、大聖持松平備後守殿者(前田利道)上使御暇ニ而候、何れも公方方之被仰渡ニ而御座候旨、隣院殿御咄ニ承之申候、是迄無之事、何之思召ニ候哉、難心得事共ニ而御座候、

一、御本山御台所入之事、得度御詮儀、御名号・御剃刀・葬式□□之
□を除キ、毎歳□□之金子六□□□□之
与□

(欠損)

【資料紹介】小松市称名寺所蔵『烏兔記』 (明和六年三月～五月十五日)

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻

小西洋子

石川県金沢城調査研究所 所長

木越隆三

人間社会研究域学校教育系 教授

黒田智

石川県立図書館 加能史料調査委員

室山孝

人間社会環境研究科 人文学専攻

渡貫多聞

Supplementary Note and Reproduction of Utoki in the Collection of the Shomyoji Temple in Komatsu

KONISHI Yoko

KIGOSHI Ryuzo

KURODA Satoshi

MUROYAMA Takashi

WATANUKI Tamon

Abstract

Utoki was a daily journal kept by Shuko, the eleventh chief priest of the Shokoji Temple in Komatsu, during the year 1769. The journal is famous for the historical information it contains on Komatsu-jian-sodo. Utoki not only has important information about the Jodo Shin sect of Buddhism in the Edo period but also various stories that Shuko recorded that should capture the interest of researchers. It is our intention to introduce a reprinting of the entire text in several installments. We hope that researchers will use our reprint to deepen discussion on Komatsu-jian-sodo.

Keyword

Komatsu-jian-sodo, Gunchu-goei, Nomi-gun, early modern Jodo Shinshu sect